

## 關山慧玄禪師遺誡について

萩 須 純 道

## 一

妙心寺開山關山慧玄禪師（一二七七一—一三六〇）の遺誡は今日開山無相大師遺誡として妙心寺派下において讀誦されている。禪師の遷化は延文五年（一三六〇）十二月十二日であるが、示寂に先だち風水泉頭にて出世の始末を後嗣授翁宗弼（一二九六一—一三八〇）に立談されたものを、授翁はその門下雲山宗峨（寂年月不詳）をして成文せしめたものといわれている。正法山誌の記すところによれば

授翁曰。先師者雖<sub>レ</sub>述而不<sub>レ</sub>作。末世放逸之兒孫。不<sub>レ</sub>知<sub>レ</sub>法之本源。於<sub>レ</sub>應燈二祖<sub>レ</sub>爲<sub>レ</sub>變<sub>レ</sub>如<sub>レ</sub>路人。故好簡親言出<sub>レ</sub>先師哀愍之親口<sub>レ</sub>者也。老僧年老而十忘<sub>レ</sub>八九。備宜<sub>レ</sub>記<sub>レ</sub>之以<sub>レ</sub>貽<sub>レ</sub>將來。昔白雲端和尚。百丈大智禪師之功。以<sub>レ</sub>亞<sub>レ</sub>于達磨<sub>レ</sub>建<sub>レ</sub>其祖堂。後來虎丘隆禪師。追<sub>レ</sub>釋<sub>レ</sub>旃<sub>レ</sub>曰。爲<sub>レ</sub>三人之後<sub>レ</sub>者。不<sub>レ</sub>能<sub>レ</sub>射行<sub>レ</sub>遺訓。於<sub>レ</sub>義安乎。遂圖<sub>レ</sub>其像<sub>レ</sub>奉<sub>レ</sub>安之。是故圓悟輪下雖<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>大慧虎丘。爲<sub>レ</sub>虎丘之兒孫。支那本朝繩繩綿綿至<sub>レ</sub>于今日<sub>レ</sub>者不<sub>レ</sub>違<sub>レ</sub>勝計。其報寔可<sub>レ</sub>知矣。看他授翁如<sub>レ</sub>此說話。是故無<sub>レ</sub>貴無<sub>レ</sub>賤。法之所<sub>レ</sub>存祖之所<sub>レ</sub>存也。余隨<sub>レ</sub>其命<sub>レ</sub>記<sub>レ</sub>之。加以<sub>レ</sub>授翁老人告戒。彼此以信受焉。

皆 康安元年辛丑正月十二日 侍者宗峨

柱香百拜書

と雲山宗峨は謹誌している。最初に一言しておかねばならないことは、この遺誠は關山派の人々により、室町幕府の壓迫を避け、また江戸期に入りても僧録司の監視に氣を配りつつ江戸中期に至り、無著道忠（一六五三—一七四四）によりその著正法山誌に收められたものである。さて雲山宗峨の誌すところによれば康安元年（一三六〇）正月十二日に遺誠が成文されたのであるから、關山慧玄禪師が示寂されてから一ヶ月後の初月忌を期して成文淨書を了つたものである。

雲山宗峨は信州の人、禪師の俗姪であり、かつて大燈の室に投じたが、大燈滅後關山の爐糶にあつて鉗鎚をうけること多年、而も峻嚴なる關山の室中より追ひ出されること二十五度、遂に許されず、のち授翁に嗣法した苦修練行人である。いま雲山が授翁の告戒により成文した遺誠は今日關山派下において誦誦されるものである。乃ち

宿昔吾大應老祖正元之間。超風波大難地。蚤入宋城。遇著虛堂老禪于淨慈。眞參實證。末後徑山盡其蘊奧。是故得路頭再過之稱。受兒孫日多之記。單傳楊岐正脈於吾朝。者老祖之功也。次先師大燈老人參得老祖于西京。侍者京輦巨峯。其隨從之際脇不到席者多年。頗有古尊宿風。卒受老祖淵粹命。長養者二十年。果彰大應遠大之高德。起佛祖已墜之綱宗。殘眞風不地之遺誠。鞭策後昆者先師之功也。老僧爰受花園仙帝勸請。創開此山。先師嚼飯養嬰兒。後昆直饒有忘却老僧之日。忘却應燈二祖深恩。不老僧兒孫。汝等請務其本。白雲感百丈之大功。虎丘歎白雲遺訓。先規如茲。誤而莫摘葉尋枝。

この遺誠を無著道忠が南涌院蒙山より入手したのは寛保三年（一七四三）癸亥夏五月十八日であり、無著九十一歳の時である。尤もこれより先き二年前、寛保元年（一七四〇）無著は塔頭大龍院の鑑明座元を介し、春光院性同座元より「關山國師遺誠」なる一紙を得ている。乃ち

國師在風水泉頭大樹下。立談于授翁曰。昔大應始祖超風波大難地。蚤入宋城。遇著虛堂。將路頭再過之稱。

受<sub>二</sub>兒孫日多記<sub>一</sub>。單<sub>二</sub>傳楊岐正脈<sub>一</sub>者老祖功也。次先師大燈老人。受<sub>二</sub>老祖淵粹命<sub>一</sub>長養者二十年。果顯<sub>二</sub>大應速大高德<sub>一</sub>。興<sub>二</sub>佛祖已墜綱宗<sub>一</sub>。殘<sub>二</sub>眞風不地遺誠<sub>一</sub>。鞭<sub>二</sub>策後昆<sub>一</sub>者先師功也。老僧爰應<sub>二</sub>花園仙帝勸請<sub>一</sub>。創<sub>二</sub>開此山<sub>一</sub>先師嚼<sub>二</sub>飯養嬰兒<sub>一</sub>也。後昆直饒有<sub>二</sub>忘却老僧<sub>一</sub>日。誤忘<sub>二</sub>却應燈<sub>一</sub>二祖深恩。不<sub>二</sub>老僧兒孫<sub>一</sub>。慎勿<sub>二</sub>爲<sub>一</sub>容易。

老祖述而不作。受<sub>二</sub>不肖授翁先師命<sub>一</sub>。殘<sub>二</sub>之鳥蹟<sub>一</sub>者也。

延文庚子臘月仲澣法孫比丘宗峨書  
右一紙 寛保元年辛酉四月十九日。大龍鑑明座元携來曰。春光性同座元。令<sub>二</sub>某傳<sub>一</sub>呈和尙云。道忠識

この一文は延文庚子臘月中澣即ち關山慧玄禪師が示寂された直後において誌されたもので、越えて翌正月十二日、同じく雲山によつてこれが潤文補筆されたものが現行の遺誠である。なほ正法山誌が所收する示寂直後の一文、即ち「關山國師遺誠」の冒頭にある「國師在風水泉頭大樹下」の「國師」なる文字は誤寫されたものであろう。雲山が筆を執つたこの時には未だ國師號は贈られていないからである。いずれにせよ禪師はその嗣授翁に關山禪の本源をなす應燈二祖の深恩を忘却しないよう遺囑されたものである。次に遺誠を拜讀しつゝその概要を叙述することとする。

## 二

宿昔吾大應老祖正元之間。超<sub>二</sub>風波大難地<sub>一</sub>。蚤入<sub>二</sub>宋域<sub>一</sub>。遇<sub>二</sub>着虛堂老禪于淨慈<sub>一</sub>。眞參實證。末後徑山盡<sub>二</sub>其蘊奧<sub>一</sub>。是故得<sub>二</sub>路頭再過之稱<sub>一</sub>。受<sub>二</sub>兒孫日多記<sub>一</sub>。單<sub>二</sub>傳楊岐正脈於吾朝<sub>一</sub>。老祖之功也。

大應國師南浦紹明（一二三五—一三〇八）は駿州安部郡の人で、生誕されたのは嘉禎元年であり、榮西寂後二十一年を経過した年である。當時道元は深草に洞上の禪を擧揚しており、榮西門下またそれぞれ活動の時代であつた。この年恰も同郷の圓爾辨圓（聖一國師）は神子榮尊、滿田彌左衛門等とともに入宋求法のため肥前平戸津を出帆しており、妙見道祐もまた入宋求法した年である。爾來南詢東渡する禪僧の來往は頻繁となり、禪界は漸くにして活潑とな

つた。この南浦生誕の年より十一年後には、その師蘭溪道隆（大覺禪師）が來朝している。

南浦は初め同州建德寺の淨辨法師について台教を學んだ。のち鎌倉建長寺の蘭溪道隆の室に投じて隨侍した。更に諸方歴參の志を立て、正元元年（一二五九）二十五才の時、入宋求法して諸知識に參じ、遂に門庭高峻のきこえ高き淨慈寺（浙江省杭州）の虚堂智愚（一一八五—一二六九）の門に投じた。虚堂の行狀によれば

師平生性不通方。與時寡合。臨事無所寬假。言纔脫口。則釋然無間。以是學者畏而仰之。

とある如く、虚堂はその性格が一般社會の常識習慣といつた方俗は問題としない。従つて時代の風潮におもねるといつたところがない。然し事に臨んで責むべきところがあれば、規矩嚴然として有免するところなく、言わずかに口を出ずれば、貴賤親疎の隔てなく呵斥するといつたところがあり、かゝる性格はまた自らその家風を形成するところのものである。南浦が入宋して諸方偏歴のち杭州淨慈寺の虚堂に遇着し、その門風を仰いで鉗錘を受くべく、その爐韞に投じたのである。大應國師塔銘によれば、南浦は參堂久しくしてのち賓客を典り、日夕吝扣した。一日畫師に虚堂老漢の壽像を寫させ、虚堂に贊を請うた。虚堂録には贊詞を次の如く誌している。

紹既明白。語不失宗。手頭簸弄。金圈栗蓬。大唐國裡無人會。又却乘流過海東。

これ咸淳元年（一二六五）夏六月のこと、徑山へ移幢する前の淨慈寺に在つた時のことである。この年の八月、虚堂は徑山（浙江省杭州）萬壽寺に勅住することとなり、南浦も隨從して徑山に移り益々策勵參究した。一夕定中において忽然大悟し、虚堂老漢に偈を呈して曰く

忽然心境共忘時 大地山河透脱機

法王法身全體現 時人相對不相知

と。虚堂巡察して「這の漢參禪大徹せり」と衆に報じ、これより一衆觀を改めたという。咸淳三年（一二六七）秋、徑山を辭して日本に歸ろうとした時、虚堂は贈るに偈を以てした。

送日本南浦知客

敲磑門庭細揣摩 路顯盡處再經過

明明說與虛堂叟 東海兒孫日轉多

明知客自發明後。欲告歸日本。尋照知客、通首座、源長老聚頭說龍峯會裏家私。袖紙求法語。老僧今年八十三。無力思索。作一偈以贖行色。萬里水程以道珍衛。咸淳丁卯秋。住大唐徑山智愚書于不動軒。

これ「日多の記」なるもので關山慧玄禪師遺誡の「路頭再過の稱を得て、兒孫日多の記を受け、楊岐の正脈を吾朝に單傳するは老祖の功なり」とあるはこの事に來由するもので、東嶺圓慈（一七二—一七九三）は「佛祖の門庭を敲磑して審細に揣摩すること千轉萬過、參すべき底の禪悉く參じ盡し、明らむべき底の法悉く明め得、透過すべき底の言句悉く透過し盡く。知らず今は個の什曆にか參ぜん。一個の參する底を求むるに終に不可得なり。是れを路頭盡くる處と謂ふ。這裏に到つて若し休し去らば、何の好大應を見ん（宗門無盡燈論卷上）」と讚詞を以て評している。門庭高峻にして學者崖を望みて却いた楊岐の正脈松源黑豆の禪を嫡傳する虛堂の室に投じて、審細に辨道これ力めた南浦が、咸淳丁卯の秋即ち咸淳三年（一二六七—文永四年）虛堂の下を辭して日本に歸ろうとするに際し、かつて南詢求法のためにはるばる航し來つた海を再び航して歸國することに擬し、千轉萬過究め盡くした悟道の意を表して、「萬里水程道を以て珍衛せよ」と慈誡した八十三老翁贖けの一偈である。「明明」とは南浦紹明を指すものであり、「東海の兒孫日に轉た多らん」と虛堂が讚じた如く、今日吾が國にては應燈關の一流のみ榮えて南浦は東海の第一祖といわれるが、恰も中國における達磨の如き地位にあることに思いを深くせざるを得ない。南浦は在宋前後九年、文永四年に歸朝した。時に南浦は三十三才であつた。

こゝで虛堂のよつて來る法系と宋代禪宗の一瞥を要する。機峰峻烈たる臨濟の門風が後世永く傳えられたのは興化存獎の一流であつた。十世紀より十一世紀にかけ興化存獎、南院惠顛、風穴延沼、首山省念、汾陽善昭等の禪傑次第

に出世し、汾陽の下に石霜楚圓（九八六一一〇三九）を出した。石霜は修行中睡魔來れば錐を以て股を刺し己事究明に精勵したといわれる禪僧であるが、その門下に黃龍慧南（一〇〇二一一〇六九）楊岐方會（九九六一一〇四九）の二傑を打出した。即ち黃龍、楊岐の各派祖である。これより大いに臨濟宗は隆盛となり、中國における禪は臨濟の獨占するところとなつた。黃龍の派祖慧南は楚圓に得法後、一時黃檗（江西）にて庵を結び積翠と號したが、のち黃龍寺（江西）に住した頭學徒大いに集り大叢林となり、その門下得法の善知識六十餘人を打出し、その多くは文人士大夫の歸仰を得て北宋に榮えた。

然るに南宋に及んでは枯淡な家風を守つた楊岐の一流大いに榮え、多くの力用ある禪僧を輩出してゐる。楊岐の派祖方會は楚圓に得法後、袁州（江西）楊岐山普通禪院に法幢を樹立したが、その超逸せる門風は、白雲守端（一〇二五一一〇七二）五祖法演（一一〇四寂）等の禪傑が續出し、法演の門下には碧巖集の著者圓悟克勤（一一三五愚）を打出した。圓悟の門下には得法者七十餘人があつた。中でも大慧宗杲（一〇八九一一一六三）虎丘紹隆（一〇七七一一一三六）の二甘露門は傑出した龍象であつた。大慧は看話禪の提唱者で宏智正覺（曹洞）の默照禪を斥け、容易に諸方の見處を背わず杲罵天と稱せらるゝ大力用の禪傑であつた。然しのもち永く法燈を傳えたのは瞎睡虎と稱せられた虎丘紹隆であつた。その法燈は應庵曇華（一一六三寂）密庵咸傑（一一八六寂）と次第したが密庵下の松源高岳（一一三一一一二〇二）破庵祖先（一一三六一一一二一一）曹源道生（寂年月不詳）の三大弟子があるが、中でも松源、破庵二傑の法孫には日本に法を傳えた禪僧が多い。

松源は示寂に臨み衆に告げ「久參の兄弟正路上に行く者あり、只黑豆の法を用ふること能はず、臨濟の道將に泯絶して聞くこと無けん」とす、傷しい哉」（虚堂錄）と嘆じ後昆のために楊岐正脈の禪を相傳する秘旨を示したという。黑豆の法とは恰も教相家が經文に示された無數の法門を黑豆を以て類別し數えた如く、眞理探究に對する微細なる態度をいう。この松源門下に無明慧性、蓮庵普嚴の二傑あり、前者より南浦入宋前の師蘭溪道隆を打出し、後者より南浦

入宋後の師虛堂智愚を打出している。

密庵下松源と竝ぶ破庵祖先の下より、無準師範（一一九三—一二四九）を打出している。無準に「三教聖人同一舌頭各門戸を開く。その旨歸を鞠すれば則ち了に二致なし」（無準傳）の語ある如く無準が禪の思想的表現において儒佛道三教の融合的傾向を以ていたことは人のよく知るところである。由來宋代の時代思潮は儒禪の一致、儒佛道三教の調和、教禪の融合、淨禪の習合等折衷習合の思潮が大きく流れていた。この時代思潮に適應して禪の舉揚を試みたのが無準であつた。この家風は日本にも流れてその門下圓爾辨圓（聖一國師）の教乘禪となり、また無學祖先の末流夢窓一派が儒佛不二を理論とし、詩禪一致を實踐した詩僧、學僧を輩出している。然るに南浦は楊岐の正脈松源一流の禪を單傳して純一無雜に祖師禪を舉揚している。

南浦の歸朝は文永四年（一二六七）であつた。先ず鎌倉の師蘭溪に謁し建長寺に留錫したが、同七年十月筑前興徳寺に出世し、遙かに瓣香を虛堂智愚に獻じた。嗣法の書とともに入寺の法語を曇侍者（西欄子曇）をして虛堂に呈せしめたところ、虛堂は「吾道東せり」と讚嘆したという。翌年博多の崇福寺に移り、爾來鎮西に玄風を振うこと三十年であつた。嘉元二年（一三〇四）後宇多上皇の勅召により入京し、安井龍翔寺の韜光庵に寓したが、間もなく萬壽寺に入寺した。後宇多上皇は東山故趾に南浦をして嘉元寺を開創せしめようとされたが叡山の嗽訴に遇い、徳治二年（一三〇七）北條貞時の招請により鎌倉に下り、建長寺に住し延慶元年（一三〇八）十二月二十九日、世壽七十四を以て示寂した。

## 三

次先師大燈老人參得老祖于西京。侍者京叢巨峰。其隨從之際脇不到、席者多年。頗有古尊宿風。卒受老祖淵粹命。長養者二十年。果彰大應遠大之高徳。起佛祖已墜之綱宗。殘眞風不地之遺誠。鞭策後昆者先師之功也。

大燈國師宗峯妙超(二八二—一三三七)は弘安五年(二八二)播州揖西(今日の揖保)郡小宅庄に紀氏浦上一國の子として生れた。母は赤松則村の姉である。若くして佛道に心を寄せ、初め書寫山(圓教寺)の戒信律師につき律藏を學びまた台教を勉學した。のち禪に心を馳せ諸禪刹に名徳を訪ひ、遂に鎌倉萬壽寺にて高峰顯日(佛國國師)に相見し、參禪辨道した。一夕僧堂に打坐したるとき、一僧壁を隔て、百丈の語を誦し「靈光獨耀迥脫根塵。體露眞常不<sub>レ</sub>拘文字」というを聞き驚然省悟し、高峰に見解を呈して印可された。これ嘉元二年のことであり、時に宗峰二十三歳であつた。

當時高峰は南浦とともに天下の二甘露門として並び稱せられた宗匠である。遇、嘉元二年南浦が入京してゐることを、遙かに鎌倉にて知つた宗峰は南浦に相見しようと決心した。南浦は虚堂の的骨、鎮西に化を布くこと三十年、而も機鋒の峻嚴と惡辣なる接化の手段は容易に人を近けず壁立萬仞の慨ありとされた宗匠である。宗峰が師の高峰より「這は是れ眞正の見解なり、宜しく法幢を建て宗旨を立すべし」と允許されながら、上洛して洛西安井の龍翔寺<sub>光庵</sub>に至り、南浦に相見して問答に及び、見處を呈すれば「方に相似を得たり」とされている。これより南浦に侍して朝參暮請を怠らず、南浦もまた「爾は是れ天然の衲子なり。是れ一兩生の參學の士にあらず」と宗峰を賞して師資相投合した。南浦が京都萬壽寺に瑞世したときも、また幕府に招かれて鎌倉建長寺に移幢したときも宗峰は南浦に隨待しており、南浦に示された「雲門關字」の外何物もなく、寔に協席につけず、その玄微を究盡せんと力むること三年であつた。

徳治二年(一三〇七)十二月、宗峰が建長寺に隨侍してまだ旬日も立たない頃、案上に銷子(かぎ)を放置した<sub>機み</sub>に豁然關字を透過した。南浦の室に至つて見處を呈すれば「夜來雲門大師吾が室に入ると夢む。爾今日關字を透る。爾は實に再來の人なり」と賞され、翌日二偈を賦して南浦に呈した。この投機の偈は今日大徳寺に重寶として傳えられている。

雲門之關也 幾乎同路

一回透得雲關了 南北東西活路通

夕處朝遊沒賓主 脚頭脚底起清風

透過雲關無舊路 青天白日 是家山

機輪通變難人到 金色頭陀拱手還

妙超胸懷如是、若不孤負師意、伏望賜一言、近擬歸故都、莫惜尊意、以爲大幸耳。

妙超九拜

僂既明投暗合、吾不<sub>レ</sub>如<sub>レ</sub>僂、吾宗到<sub>レ</sub>僂大立去、只是二十年長養、使<sub>レ</sub>人知<sub>レ</sub>此證明。

爲妙超禪人書

巨福山 南浦紹明 (華押)

この雲關の偈に附記して「妙超が胸懷是の如し。若し師の意に孤負せずんば、伏して望むらくは一言を賜へ。近く故都に歸らんと擬す。尊意を惜しむこと莫くんば以て大幸と爲すのみ。妙起九拜」と添え、南浦はその紙の餘白に印可證明して「僂既に明投暗合す。吾僂に如かず。吾が宗僂に到つて大いに立し去らん。只是れ二十年長養して、人をして此の證明を知らしめよ。妙超禪人の爲めに書す。巨福山南浦紹明」と自書し、併せて法衣を付して法信を表した。これ宗峰二十六才の時である。かくして二十年長養の命を受けた翌年(延慶元年)十二月二十九日、師の南浦は先記の如く建長寺に示寂した。

爾來翫光晦跡二十年の悟後の修道が行われ、貴い陰德の生活が始つた。洛東雲居庵に棲止し、或は五條橋邊の乞者隊裏の群に入り、また飢寒を忘れて刻苦自勵するところがあつた。今日大徳寺に傳わる「大燈國師筆寫本景德傳燈錄三十卷」の如きもその跋文によれば正和二年(三三三)五月、四十日にして筆寫を了えたとあり、その烈しき努力は

實に驚嘆の外はない。宗峰の偉大さは二十年長養の陰徳にある。應永三十三年（一四二六）春作禪興によつて著録された大燈國師行狀に乞者隊裏の生活が閑却されているので、一休宗純（一三九四—一四八一）が「大燈國師行狀の末に題し「挑起大燈一輝二天、鸞輿競譽法堂前、風飈水宿無三人記、第五橋邊二十年」（狂雲集）」と慨嘆したのもこゝにある。のち花園天皇に召されて對坐談話し、天然の氣宇王の如くであつたという。そして正中の宗論には通翁鏡圓（一二五七—一三二五）の侍者として南都北嶺の學匠と論争し、その信賴は益々加わり、南禪寺住持勅命のことがあつても辭退した。

かくして「長養二十年」の垂誠を守り、嘉曆元年（一三二六）大德寺法堂の落成とともに佛成道の十二月八日をトシて祝國開堂の式典を舉行した。花園、後醍醐兩朝の歸仰を受け、「本朝無雙禪苑」の宸翰竝に宸額を後醍醐天皇より下賜されるに至つた。大德寺を一流相承の禪刹となすべき宸翰を兩朝より下賜されたことも意義深いが別稿に譲りたい。これ寔に「大應遠大の高徳を彰し、佛祖已墜の綱宗を起」したものでいねばならない。

正慶元年（一三三二）即ち元弘二年宗峰はその道風を暮い集る雲衲のために嚴しき示衆をされている。求道者は飽くまでも「道」を重じ、菩提心を堅持すべきことを誡めた。

汝諸人來此山中、爲道聚頭、莫爲衣食、有肩無不衣、有口無不喫、只須十二時中向無理會處、窮來究去、光陰如箭、慎勿雜用心。

そして建武二年（一三三五）兒孫のため遺誡し

老僧行脚後、或寺門繁興、佛閣經卷鏤金銀、多衆鬧熱、或誦經諷呪、長坐不臥、一食卯齋、六時行道、直饒雖恁磨去、不以佛祖不傳妙道掛在胸間、則撥無因果、眞風墮地、併是邪魔種族也、老僧去世久矣、不許稱兒孫、或儻有二人、綿葛野外、一把茅底、折脚踏下、煮野菜根、喫過日、專一究明已事者、與老僧日日相見、報恩底人也、誰敢輕忽哉、勉旃、勉旃。

この遺誠は示衆の法語とともに一つにし、多少字句の修正をなし「興禪大燈國師遺誠」として今日叢林にて讀誦されている。宗峰が先師南浦の「二十年長養」の慈誠を守り、所謂風殮水宿、五條橋邊の鎔光晦跡した悟後の修道の體験を透しての言葉である。また禪が南都北嶺にその法幢樹立を沮まれ、幾多の先徳が受難の道を辿つたにも拘らず、當時漸くにして禪は興隆の運に向つた。と同時に官利的性格をもつて來た。名聞利養の徒も出ずるであらうことは推測される。宗峰は三度南禪寺に勅召されて赴かす、また元弘三年（一三三三）十月、大徳寺を五山第一としようとする勅があつても受けなかつた。この遺誠は佛法を中心とするよう兒孫に對する慈誠であるが、同時にまた宗峰が身を以て當時の佛教界の動向を睥睨しての誠めでもある。いかに寺門繁興し、佛閣經卷その善美を盡し、學徒集りて鬪鬪を極め、或は型の如く誦經、坐禪、法式等行われても、佛祖嫡傳の佛法を中心としなかつたなら佛教の眞風は地に墮ちる。たとえ一把茅底に日を送つても、專一に己事を究明するものは老僧（宗峰）と日日相見報恩底の人であるという、この後昆を鞭策する眞風不地の遺誠は宗峰の示寂する二年前即ち建武二年になされたものである。

## 四

老僧受<sub>レ</sub>花國仙帝勸請。創開此山。先師嚼<sub>レ</sub>飯養<sub>レ</sub>嬰兒。後昆直饒有<sub>レ</sub>忘<sub>レ</sub>却老僧<sub>二</sub>之日。忘<sub>レ</sub>却應燈<sub>二</sub>祖深恩。不<sub>レ</sub>老僧兒孫。汝等請務<sub>レ</sub>其本。白雲感<sub>レ</sub>百丈之大功。虛丘歎<sub>レ</sub>白雲遺訓。先規如<sub>レ</sub>茲。誤而莫<sub>レ</sub>摘<sub>レ</sub>葉尋<sub>レ</sub>枝好。

この「關山慧玄禪師遺誠」の結びにおいては應燈二祖の深恩を忘却しないよう誠められている。禪師は花國上皇の勸請により妙心寺を開創したのであるが、たとえ將來老僧（關山）を忘却することがあつても、その本源をなす楊岐の正脈松源一流の禪を吾が國に單傳した大應老祖と、その佛法永續のために眞風不地の遺誠を残して後昆を鞭策した先師大燈の深恩を忘却するものは吾が兒孫に非らずとまでいわれている。

かつて楊岐方會の嫡嗣白雲守端は叢林開闢の祖百丈和尚の功が初祖達磨大師につぐを以て、百丈の祖堂を建て、そ

の偉徳を鑽仰した。白雲の法燈は五祖法演、圓悟克勤と次弟し、圓悟下には大悲、虎丘の二傑があつたが、虎丘紹隆は白雲の遺訓に歎じ、奉先の禮を遵行し、兒孫の行くべき道を示したため、その法流は繩々綿々として今日に至つたことに鑑みなければならぬという意味のことを附け加えられている。

白雲守端（一〇二五—一〇七三）が達磨、百丈を祖堂に祀つて禪林の綱紀としたことは、白雲守端禪師廣錄祖堂綱紀序に見えている。

吾道盛於此土、初祖菩提達磨之綱焉。躬立禪林之制、百丈大智之紀焉。此實天下之共知。而奈何天下祖堂中、各以開山傳次者、爲其祖、殊不思乃宗乃祖、所傳所持之最者乎。嗚呼教來五百年後、達磨始來、嚮之諸家之賢者、豈不知性卽乎聖。何爲竟自以性以聖之泥乎。乃須少林之後、猶彈指頃、不假文字語默有無、釋然亡其所待、而自得還其本。又古之巖居穴處者、但以法爲勝爲味。殊不慮今日其間者驕。獨大智禪師慮之、而廓以禪林之度、由是資之、而少林之風至今藹然於天下。吾欲天下祖堂中、以達磨大智正其位、以開山傳次者陪之。貴來者尊其始、而歸其大、豈不然乎。熙寧三年歲次庚戌十月初一日立。

この文が誌されたのは熙寧三年（一〇七〇）であるから、白雲が示寂に先つ二年前のことである。白雲の念願とするところは、この文によつて知る如く、禪が中國に盛んになつたのは初祖菩提達磨の傳禪にあり、これを綱とする。而して百丈懷海が禪林の制度を確立して、禪獨自の形態を整えたのを紀とすべきであることは天下みな等しく知るところである。然るに天下祖堂の中には開山傳次の祖師を祀るのみにて、乃宗乃祖所傳所持の最なるものを思わざるを奈何せんと白雲守端は慨嘆している。佛教東漸して五百年、達磨直指の法を傳えて以來、間もなく不立文字の禪は傳播するに至り、佛教本來の在り方に還ることが出来たが、然しまた世俗を超越する巖居穴處の者の中には法を最勝として禪天魔の驕者も出ずるに至つたことであろう。百丈はこれを慮り、禪林の清規を定めて達磨少林の風を資けたことにより、禪の隆盛を見るに至つた。この故に白雲は祖堂に達磨、百丈の二祖を正位とし、開山傳次の祖をこれに陪し

て祀ることゝした。そしてその法源を尊重し、禪宗の綱紀となるべき祖師に歸一せしめようとした。

白雲守端の寂後三十年を経た北宋の大觀元年（一一〇七）、洪覺範によつて撰述された林間錄にも白雲の遺訓を採り上げ「天下叢林の興ることは大智禪師の力なり。祖堂は當に達磨の祖像を其の中に設くべし。大智禪師の像は西に向へ、開山尊宿の像は東に向へば其の宜しきを得ん。當に止だ開山尊宿を設けて、而も其の祖宗を略すべからず」（石門洪覺範林間錄卷上）とあり、白雲の楊岐派の系統と異なる黃龍系の洪覺範がこのことに注目したところをみれば、白雲の提唱はやがて教團内に浸透していつたことゝ思われる。

五燈會元（卷十九）虎丘紹隆（一〇七七一—一一三六）の條によれば

徒虎丘道大顯著、因追釋白雲端和尚立祖堂故事。乃曰爲二人之後、不能躬行遺訓於義（安）乎。遂圖其像以奉安之。

とあり、このことは虎丘紹隆の寂後二十四年の南宋紹興三十年（一一六〇）、宗門七部書の一いわれる大慧門下曉聲の撰になる羅湖野録に誌されている。乃ち

虎丘隆禪師——中略——及住虎丘、道大顯著。因追釋白雲端和尚立祖堂故事、乃曰、爲二人之後、不能躬行遺訓、於義安乎、遂圖像奉安題讚于上、達磨曰、闔國人難挽、西携隻履歸、只應熊耳月、千古冷光輝、百丈曰、迅雷吼破澄潭月、當下曾經三日晷、去却膏肓必死病、叢林從此有家風、開山明教大師曰、春至百花觸處開、幽香旃旆襲人來。臨風無限深深意、聲色堆中絕點埃、嗚呼百丈創立禪規以來、叢林卒不至於弛廢、實本于此、白雲以百丈配享達磨、有識靡不題其議、可謂知本矣、隆既能遵行奉先之禮、又從而爲讚、發明其道、有足多也。

先に一言するように虎丘紹隆は開悟下の俊傑で、睡虎と稱せられた龍象である。虎丘山に住するに及び道風大いに振い、道望大いに高まつた。この虎丘は白雲和尚祖堂を建てての故事を追憶し「人の後となり、遺訓を躬行する能は

ざるは、義に於て安からんや」といふ、遂に像を圖して奉安した。そして圖上に贊をし、達磨大師には

闍國人難<sub>レ</sub>挽<sub>レ</sub>。西携<sub>レ</sub>隻履<sub>レ</sub>歸<sub>レ</sub>。只應熊耳月。千古冷光輝

百丈禪師には

迅雷吼破澄潭月、當下曾經三日聾、去却膏肓必死病、叢林從此有家風。

開山明教大師（虎丘山雲岩禪寺開祖佛日契嵩）には

春至百花觸處開。幽香旃旆響<sub>レ</sub>人來、臨風無限深々意、聲色堆中絕<sub>二</sub>點埃<sub>一</sub>

と誌したという。百丈が叢林の清規を制定して以來、禪宗叢林の確立をみた。白雲は百丈の徳を讃えて、初祖達磨とともに合せて祖堂に祀ることとした。法源宗綱を立つるものとして有識者のみな肯うところであつた。この白雲の遺訓を虎丘は身を以て實行し、奉先の禮を遵行したため、のち虎丘の門流大いに榮えることが出來た。

妙心寺開山關山慧玄禪師は「汝等請ふ、その本を務めよ、白雲は百丈の大功を感じ、虎丘は白雲の遺訓を歎ず、先規茲の如し、誤つて葉を摘み、枝を尋ぬること莫くんば好し」とその嗣授翁に述懐し、應燈二祖の深恩を忘却しないよう遺囑された。

## 五

さてこの關山慧玄禪師遺誠は先述した如く禪師寂後一ヶ月した康安元年正月十二日、雲山宗峨によつて成文されたものであつた。のち授翁の嗣拙堂宗朴が妙心寺に住山した時、室町幕府の反感を買ひ妙心寺は一時中絶した。この中絶した妙心寺を復興の運に向わしめる契機をなしたものは南禪寺塔頭正眼院にいた根外宗利西堂であつた。即ち宗利西堂が幕府の足利氏と血縁關係にあつた南禪寺塔頭德雲院の住持延用宗器より、關山派の祖塔である微笑塔を譲り受け、犬山瑞泉寺より日峰宗舜を迎え、妙心寺を中興の運に向わしめたのであるが、この根外宗利は實に雲山宗峨の嗣

で、この遺誠を秘かに胸中に收め、幕府の妙心寺壓迫時代に烈々たる祖道精神を持つて、五山の人々と伍していた。根外宗利はこの遺誠に跋文をしていう。

吾雲山先師者。信陽之種族而玄祖佛母之外孫也。稟受朴實而隨侍玄祖者多年。非少根劣機所能及。玄祖一日謂先師雲山曰。末世兒孫即開場。知其祖。不見其開場。則不知祖恩。余請問其事。玄祖曰。其建治上皇爲大應老祖。興造嘉元寺。爲開山初祖。住未幾。應關東請。董建長己一年。卒寂于巨峯。然嘉元寶利。不圖遇台徒之仇。却後大光大燈宗論之際。手雖握赤幡。相後數年。嘉元寶利既廢亡。則非上皇願轍空耳。末世兒孫亦不見開場。則不知始祖法恩明矣。余憶之關山祖師者。非孫受其祖印耳。應祖剃度門人。而以遺志倚龍寶國師。他後愛失其恩。貽遮般遺誠。故其愛之也深。故其思之也切。故其慮之也遠。見其寺不觀其法。者放逸之謂也。勸君子務其本。本立道成。將來衲子信受一祖法恩。非下慚關山祖師之遺意耳。又是自己之幸也。夫源深者流久。期吾法久住者。宜返復此訓而已。皆應永庚子臘月。根外宗利欽書。

根外宗利がこの跋文を認めたのは應永庚子臘月即ち應永二十七年(一四二〇)十二月、關山禪師每歲忌を迎えるに當り、祖訓に思いを深くし、且つは關山派の悲運を慨嘆して誌したこともあろう。根外は先師雲山の董陶を受けたから、この遺誠は終始己が念頭より去ることが出来なかつたであらう。根外の誌すところを要約すれば、末世の兒孫は祖師の開法した寺に即して祖恩を知るのが常である。然るに法源をなす大應老祖の嘉元寺は台徒の壓迫を受け、のち正中の宗論で教禪の論争は通翁鏡圓(大光)宗峰妙超(大燈)二師の力により禪宗の勝利に歸したとはいうものゝ、大應の嘉元寺なきことは後宇多上皇の願轍空しきのみならず、末世の兒孫をして始祖の法恩を忘却せしむるものである。吾が關山祖師は應祖剃度の門人であり、その遺志によつて大燈に隨從したものである。それ故應燈二祖の法恩を信受することが關山祖師の遺志にかなうのみならずまた自らの幸せとするところのものであることを説き、「源深きものは流れ久し、吾が法の久住を期せんもの、宜しく此の訓を返復すべきのみ」と結んでいる。

かく根外の跋文は應燈關門流の始祖大應の開創する嘉元寺なきため、末世の兒孫が始祖の法恩を忘却することを憂えてゐる。同時にまた「末世兒孫即開場知祖恩不見其開場則不知祖恩」といつた詞を繰り返して強調することは、暗にまた關山祖師の開創する妙心寺の中絶、龍雲寺時代を慨嘆してのことでもあつたであらう。根外宗利が南禪寺德雲院の延用宗器より花園の微笑塔を譲り受けたのは永享四年（一四三二）であり、この跋文を誌してから十二年後のことである。根外はのち鎌倉に行き大應の塔所のある天源庵の塔主となり、始祖大應の塔所守護の任に當つた。因に大徳寺所藏の蓮庵、虚堂、大應三祖の自賛頂相は天正年中、天源庵より移管されたものであると（二四）である。根外はまた推されて、關東十刹の一である禪興寺にも住した。そして根外の遺志は温中宗純に傳つた。

温中宗純は五山之上の南禪寺に關山派として瑞世した最初の人である。勿論温中以前に松源派として瑞世した人はあるが、花園の關山派として名譽ある南禪に住したのは温中を以て嚆矢とする。元にも留學した學徳兼備の禪僧であつた。この温中は根外の剃度の弟子である。根外が鎌倉禪興寺に住した頃、温中の父は根外に歸敬すること篤きものがあつたので、この因縁から温中もまた根外の弟子となつた。然し根外は温中成人の中途にして示寂したので、温中は根外の遺志により、無因宗因の嗣春夫宗宿に隨從して遂に嗣法した。この根外、春夫ともに妙心寺中絶の悲運に相遇して、祖道意識を高調し、關山の佛法を護持した人々である。春夫が松源十祖の像を作つて、松源一流の來由を明かにし、祖恩に對する認識を深めたことは、根外が關山派の祖塔である微笑塔を回復したことともに銘記すべき事である。この二師に育まれた温中であつた。温中はこの遺誠を、病床臨終にあつた根外より傳授され、松源門流の中應燈關の一流のみ後に榮えたことに思いを深くし、終生根外の遺訓を遵守した。

温中は關山慧玄禪師遺誠に次の如き跋文を誌している。

玄古佛遺誠一篇者。吾得度之師根外老人之所授也。老人諱宗利。雲山峨和尚之的嗣也。老人昔在二南禪一日。得二延用尊宿之一賜。使日峰老伯興起花園頽廢底人也。老人自茲往鎌倉乞爲天源（大應祖落命之塔也）塔主。未幾

諸山巽住禪興。厥際吾老父甚歸敬老人。是故余亦乞而爲其徒者也。惜哉老人中道而委順。余以老人遺志。繇春夫宿和尚。老人于先示微恙之際。以一書授余曰。此是玄古佛遺誠一篇也。他時異日勿輕蔑旃云矣。余得旃景奉者多年。想夫虛堂老祖雖有數十嗣。貧三四世而絕。唯我大應祖耳。綿綿流久。有下爲兒孫。宜自知者。虛堂曰。吾道東矣。大通禪師曰。南浦法兄於虛堂老伯。頗有超師作。是則所以爲本朝大祖也。次大燈國師爲兒孫。海福。韜光二十年來千辛萬苦。寔是真古佛也。依旃關山老祖。舉二祖之大功。起兒孫偶爾者。萬世至訓也。後覽者勿容易旃矣。康正丙子臘月。住南禪遠孫比丘。溫中宗純九拜書。

溫中がこの跋文を誌したのは康正丙子臘月、即ち康正二年（二四五六）十二月、關山禪師每歲忌を迎えるに當つて誌したものである。當時妙心寺は既に微笑塔が關山派に歸し、妙心寺中興の祖日峰宗隣（文安五年—一四四八—寂）も遷化して義天玄承の時代であつた。義天が細川勝元の庇護により龍安寺を開創し、關山禪師の百年遠諱も近くなつた頃である。妙心寺の悲運を目のあたりにした溫中が關山派出身として當然祖師の遺誠に思いを深くしこの跋文を誌したことと思ふ。かつて虚堂は大應の筑前興徳寺入寺の法語を見て「吾道東せり」と讚嘆したが、溫中在世時代虚堂門下中、超師の作ありと西礪子曇（大通禪師）も稱えた大應の法流のみ榮えていた。寔に溫中は舊師根外が跋文に誌した「源深者流久」の詞を深く感じたことであろう。そこで溫中は大應を「本朝の大祖」となし、またその悟道を守つて千辛萬苦韜光すること二十年の大燈を「是れ眞の古佛なり」といひ、この故に關山祖師は應燈二祖の大功を擧げて兒孫に示めされたもので、この關山慧玄禪師遺誠は萬世の至訓であるとした。



上述の如くこの遺誠は南禪寺の關山派の人々により傳持されたが、江戸期に至り承應年間、駿州由比桃源寺(妙心寺直末)の耽源宗陽に落掌することになった。耽源に遺誠を渡したのは耽源と血縁關係のあつた一老僧であるが、幕府の干渉を憚つてか内密の中に行われ、この老僧の名もまた住院の名も公示しないことや、その老僧の存命中にはこの遺誠を弘めないことを約束して、遺誠の授受が行われた。従つてこの老僧が直接妙心寺へ讓渡することは己が院名僧名等判明するから、それを憚つて肉縁の耽源に渡したものとされる。

元來江戸幕府は宗教政策上、南禪寺金池院の崇傳をして諸寺諸山に對する法度を制定し、その取締りを嚴にしたが、なかでも朝廷との關係が深かつた大徳、妙心えの干渉は強く、この承應年中より二十數年前には所謂紫衣問題により、澤庵、玉室、單傳、東源等四師配流の事件もあり、恐らくこの老僧には生々しい記憶のあつたことであろうし、この事件の彈壓干渉の中心人物であつた僧録司の崇傳は既に故人となつたといふものゝ、依然として幕府えの細心の注意を必要としたことであろう。乃ち耽源の跋文によれば

余承應中。有<sub>レ</sub>肉縁<sub>ニ</sub>先祖。住<sub>ニ</sub>京師南禪之一院。一日趣<sub>ニ</sub>武陵<sub>ニ</sub>訪<sub>ニ</sub>余<sub>ニ</sub>茅院。投宿數日。話<sub>レ</sub>余<sub>ニ</sub>曰。今吾南禪之一院者。昔吾天慶義雲禪師之居所也。禪師者。花園無因和尚的孫。溫中純公世次也。是故溫中天慶師資與<sub>レ</sub>君同。花園派下之裔也。故有<sub>ニ</sub>一書<sub>ニ</sub>相殘者。余多年想<sub>ニ</sub>寄<sub>ニ</sub>附于師。故今日寄<sub>ニ</sub>來<sub>ニ</sub>于茲。即授<sub>ニ</sub>支祖親口之遺誠。且曰。此書竊落。在君派中。則他時當<sub>ニ</sub>祭<sub>ニ</sub>然<sub>ニ</sub>于世。雖<sub>レ</sub>然我生前。必勿<sub>レ</sub>弘<sub>レ</sub>施。又勿<sub>レ</sub>記<sub>ニ</sub>吾院吾名。若公則有<sub>レ</sub>僧司。事難<sub>ニ</sub>成<sub>ニ</sub>稔。故密<sub>ニ</sub>施<sub>ニ</sub>云。余拜受<sub>ニ</sub>而歎<sub>ニ</sub>曰。關山古佛。觀<sub>ニ</sub>三<sub>ニ</sub>祭<sub>ニ</sub>季<sub>ニ</sub>世<sub>ニ</sub>偶<sub>ニ</sub>爾<sub>ニ</sub>者。殘<sub>ニ</sub>遮<sub>ニ</sub>散<sub>ニ</sub>遺誠。明<sub>ニ</sub>如<sub>ニ</sub>手<sub>ニ</sub>中<sub>ニ</sub>圭。果今日兒孫不知<sub>ニ</sub>三<sub>ニ</sub>祖<sub>ニ</sub>法<sub>ニ</sub>恩<sub>ニ</sub>者。如<sub>レ</sub>麻似<sub>レ</sub>粟。又且歎<sub>ニ</sub>曰。本寺應<sub>ニ</sub>永<sub>ニ</sub>之大變。寔<sub>ニ</sub>如<sub>レ</sub>覆<sub>レ</sub>掌<sub>ニ</sub>者多年。故無<sub>レ</sub>因<sub>ニ</sub>雲山<sub>ニ</sub>日峯<sub>ニ</sub>春<sub>ニ</sub>夫<sub>ニ</sub>及<sub>ニ</sub>徒<sub>ニ</sub>門<sub>ニ</sub>諸<sub>ニ</sub>老<sub>ニ</sub>會<sub>ニ</sub>于<sub>ニ</sub>一<sub>ニ</sub>所。無<sub>レ</sub>暇<sub>ニ</sub>談<sub>ニ</sub>談<sub>ニ</sub>如上<sub>ニ</sub>遺誠。徒<sub>ニ</sub>潛<sub>ニ</sub>一<sub>ニ</sub>方。不能<sub>レ</sub>流<sub>ニ</sub>通<sub>ニ</sub>于<sub>ニ</sub>徒<sub>ニ</sub>門。空<sub>ニ</sub>如<sub>ニ</sub>魯<sub>ニ</sub>論<sub>ニ</sub>在<sub>ニ</sub>壁<sub>ニ</sub>中。希<sub>レ</sub>後<sub>ニ</sub>彦<sub>ニ</sub>依<sub>ニ</sub>古<sub>ニ</sub>佛<sub>ニ</sub>遺誠。務<sub>ニ</sub>其<sub>ニ</sub>本<sub>ニ</sub>蒙<sub>ニ</sub>應<sub>ニ</sub>燈<sub>ニ</sub>二<sub>ニ</sub>祖<sub>ニ</sub>之<sub>ニ</sub>靈<sub>ニ</sub>感。

綿綿跨竈。恢張吾門。事可翹足矣。矣。旨正保二年九月。駿陽桃源耿源宗陽拜書。

この跋文を誌したのは正保二年九月とあるが、無著道忠は正保は承應より以前の年號であるから、享保を誤寫したのではないかと註している。然し假りに享保二年（一七一七）であるとするとすれば、この遺誠を耿源が南禪寺の一老僧より付與された承應年中より六十年以上を経てこの跋文を誌したことになる。恐らくこれは享保二年ではないと思うのである。耿源の跋文の後に應禪の跋文があるが、その文中に

余元祿中。一日訪桃源梅溪老隱。茶話之次。談先師竺源崇祖之遺志。溪甚欺曰。吾有關山祖師遺誠之一書。其意符合于此。斯則承應中京師南禪之僧歸付吾師耿源者。示其書。

とあり、これによつて見れば承應より三十數年を経た元祿の頃には既に世代が變つて「吾が師耿源に歸付するものなり」といつている。それ故元祿より更に降つた享保二年に耿源がこの跋文を誌したとは考えられない。この耿源宗陽が示寂したのは延寶九辛酉年（一六八一）九月六日であり、世壽八十六歳であつたから、耿源がこの跋文を誌したのは承應より延寶までの間に誌したことになる。承應、明曆、萬治、寛文、延寶と年號は次第するのであるが、どの年號を正保と誤寫したのかと疑うのである。一體當時の習慣としては干支を誌するのが通常であるが、耿源の跋文にはたゞ「正保二年九月」とあるのみで干支を記していないから不明である。桃源寺の傳えるところによれば耿源は甲州萬澤の廣福寺を開創し弟子梅溪に席を譲り、駿河由比に來錫して桃源寺を中興した人で、のち梅溪も桃源寺に住した。耿源が桃源寺中興に當り一寺建立の願出でを幕府にしたのは正保二年であつた。幕府より一寺建立の許可を得てのち上洛し、妙心寺より直末編入の許可を得て桃源寺に歸つたのが同年九月十日であつたというから、或はまた耿源は桃源寺建立の年を記念し、この遺誠の跋文にも承應より遡つた正保二年九月と誌したのではないかと思われる。さて承應といえは妙心寺は愚堂東庵（一五七七—一六六一）の活動時代で、數年後には關山祖師の三百年遠諱を迎えるという時であり、妙心寺の基礎確立の時代である。いまこの南禪寺の一老僧もこの遺誠を花園の關山派に歸せし

め、妙心寺教團に畫龍點睛せしめたく念願したことであろう。偶々江戸に趣き途中駿州桃源寺に立ち寄り、血縁の耽源に付與したのであつた。耽源もこの跋文に誌す如く、應永六年（一三九九）妙心寺中絶以來、この遺誠が花園の正系に傳らず、一方に潜んで徒門に流通しなかつた。耽源がこの遺誠を入手するまでには二百四十余年の歲月を經てゐる。寔に魯論の壁中に在つた感がある。然しながらこれが廣く宣布されるには次代に俟たねばならなかつた。

耽源の嗣に梅溪（一六三五—一七〇五）があつた。偶々元録年中、梅溪の住する桃源寺へ興禪寺（靜岡）の應禪普善（一六八〇—一七五〇）が來訪し、茶話の折應禪はその師竺源が始祖大應を崇めよと遺囑したと語つたところ、梅溪は先師耽源より所傳する關山慧玄禪師遺誠の一書を應禪に示した。應禪の師竺源は大應の祖恩を強調した人で、吾が國の大應は中國の達磨に匹敵する祖師であり、その祖恩においては一つである。かつて衡梅院の雪江宗深は日日安井の龍翔寺に大應の祖塔を拜し、卒風暴雨といえども拜塔を欠かさなかつた。然るに近來多くの禪僧は應燈二祖を路傍の人を見るが如き態度で嘆かわしい。汝（應禪）他日住院するに及べば、その牌を建て念讚獻備を怠らず、勿論忌日の宿忌半齋を修して、祖恩に謝さねばならないと應禪に訓誡したという。いまこの應禪が桃源寺の梅溪より、この關山祖師の遺誠を示され感激したことはいうまでもない。そこでこの遺誠は駿州府中（靜岡）興禪寺の應禪に傳わつた。如上は應禪の跋文によつて窺われる。即ち跋文には

先師竺源告余曰。支那於達磨。本朝於大應。至其恩一也。故衡梅老祖。每日詣龍翔祖塔。雖卒風暴雨。不  
缺。或修塔院弊漏。古來如此。近來衆禪於應燈二祖。彷彿見路人。你他日有把茅蓋頭。新當建其牌。念讚  
獻備亦宜修之。何況宿忌半齋乎。余元祿中。一日訪桃源梅溪老隱。茶話之次。談先師竺源崇祖之遺志。溪甚  
歎曰。吾有關山祖師遺誠之一書。其意符合于此。斯則承應中京師南禪之僧歸付吾師耽源者。示其書。余禮拜  
歎曰。奇哉國師。察今日之兒孫。明知秋月穿潭底。趙宋之間。諸師南詢。歸朝之後。各自有開場。兒孫稱其  
德。然吾大應始祖兒孫。閩國雖日多。不知祖恩功者甚多。有志愛之尤哉。此事乎。夫顯家於傳教。密家於

弘法。各祖ニ述其人、其外雖ニ小宗小派、賞ニ其祖恩、如今稱「日多之孫」者、不知祖恩之深。悲哉限ニ吾門。有志至ニ于此。豈不嗟悼乎。今幸有古佛親口遺誠。吾欲弘旃。同志希扶旃矣。皆享保丁未。應禪普善百拜書。

應禪がこの跋文を誌したのは享保丁未即ち享保十二年（一七二七）であり、承應年中、桃源寺の耽源が南禪寺の一老僧より關山祖師の遺誠を付與されてから七十余年を経ている。應禪はいう、南詢求法の諸師は歸朝後、各開創した寺があるから、兒孫はみなその徳を稱えている。然るに應燈關門流の兒孫は日に多いのではあるが、始祖の恩功を知らない。天台の傳教、眞言の弘法は勿論、その外小宗小派と雖もみなその祖恩を稱え、祖師を祖述している。然るに今日吾が大應の「日多の孫」と稱するものみな祖恩の深きを知らない。吾が門に限つて始祖の恩を知らないことは悲しいことである。いま幸いに關山祖師親口の遺誠があるからこれを廣く弘めようと思う。同志希くはこれを支持されよと、應禪は悲願を立てている。

かくしてこの遺誠は駿河を中心に流通せんとした。當時禪界は西に古月あり、駿河に白隠あり、而して京都に無著ありといつた時代である。應禪が跋文を誌した享保十二年は白隠四十二才の時に該當し、やがて活動期に入らうとするときである。白隠慧鶴（一六八五—一七六八）が駿州原の松蔭寺に法幢を樹立したとき道風天下を風靡したのであるが、白隠が虚堂録開講に當り參學の徒を提撕するために、息耕録開筵普説を著したり、大燈錄に下語評唱した槐安國語の著述がある。或は寶曆元年（一七五一）同州高林寺に營まれた大應國師四百年忌齋に大應錄を提唱した時、合衆二百余員といふ、更に明和元年（一七六四）八十才の時大應錄を提唱して東海日多遠大の懸記を顯揚した。この時清衆七百余員といわれる。そしてこの年後事を上足遂翁に托している。或はまた白隠には大應、大燈、關山三祖の像を畫いた墨跡諸處に散在している。桃源寺所藏の耽源の掛眞は白隠の筆にて寶曆年間の畫贊といわれ

躍倒仙桃源上春。千巖雪月轉鮮新。後來風水白頭訣。爛嚼花園毒果辛

との贊より耽源の業跡を稱えてこの間の消息を伝える如くである。白隠が關山祖師遺誠の一文に關しての知不知はと

もかくとして、關山古佛の遺志は實踐されたものといつてよい。

さてこの遺誠は寛保三年（一七四三）に至り、初めて京都龍華院に住する無著道忠の知るところとなつた。この時無著は九十一歳の高齢であり、示寂に先き立つ一年前のことである。この年の五月十八日、妙心寺塔頭南涌院（廢院）の蒙山がこの關山慧玄禪師遺誠を無著に示したのである。當時この原本は駿州蒲原（かづはら）の龍雲寺にあつたのを、かつて蒙山に随侍した濃州加治田の龍福寺（加茂郡）の僧是忍が書を發して蒲原龍雲寺より書寫したものを求め得、塔頭南涌院の蒙山に示したものである。そこで無著は塔頭大龍院の鑑明座元を駿州蒲原龍雲寺に遣わし、雲山宗峨成文にかゝる古佛親口の關山慧玄禪師遺誠、根外、溫中、耽源、應禪等の跋文總じて六紙の校合をなさしめた。同年六月三日、鑑明座元は駿州より歸洛して、再校合の結果異るところなき旨を報告した。こゝにおいて無著はこれを自著正法山誌に所收したのである。（一四）

先述した如く、關山禪師示寂の直後、即ち延文五年十二月仲瀚、雲山によつて成文された遺誠文は妙心寺塔頭内に傳えられたものらしく、無著はこれより先き二年前、即ち寛保元年（一七四一）に鑑明座元により入手しているのであるが、關山禪師初月忌の日潤筆成文された現行の無相大師遺誠といわれる關山慧玄禪師遺誠はかゝる流傳の經路を経て、その祖徳は顯揚され讚誦されるに至つたものである。因に遺誠の原本の存否については應禪普善が靜岡興禪寺を辭任し蒲原龍雲寺を再中興して隱退したとき、遺誠文は龍雲寺に移管されたと思われる。そして應禪は寛延三年（一七四三）三月二十九日、七十一歳を以て示寂した。無著は龍雲寺に傳つた原本を寫し正法山誌に所收したのであるが、のち安政の大地震のとき龍雲寺伽藍の大破とともにこの遺誠の原本も散佚して今日傳つていない。

註

(一) 正法山誌卷四

(二) 同上

- (三) 虛堂錄卷十(虛堂錄新添)
- (四) 圓通大應國師塔銘
- (五) 虛堂錄卷十(虛堂錄新添)
- (六) 大燈國師年譜正慶元年の條
- (七) 大燈國師年譜建武二年の條
- (八) 大燈國師年譜嘉曆元年の條
- (九) 大燈國師年譜建武元年の條
- (一〇) 白雲守端禪師廣錄卷一(大日本續藏經第二輯第二十五套)
- (一一) 羅湖野錄卷下
- (一二) 禪學研究第四十五卷拙稿「關山慧玄禪師頂相について」參照
- (一三) 正法山誌卷四
- (一四) 國譯禪學叢書第十二卷所收圓通大應國師塔銘脚註
- (一五) 禪學研究第四十五卷拙稿「關山慧玄禪師の頂相について」參照
- (一六) 正法山誌卷四
- (一七) 正法山誌卷四
- (一八) 同上
- (一九) 同上
- (二〇) 龍雲寺記錄
- (二一) 桃源寺記錄
- (二二) 正法山誌卷四
- (二三) 白隱禪師年譜參照
- (二四) 正法山誌卷四